
元女子高の王子様！

笹沢 莉瑠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

元女子高の王子様！

【Nコード】

N2948J

【作者名】

笹沢 莉瑠

【あらすじ】

春休みに、受験した高校を見に行った美弥は、静かな校舎に響くピアノの音に惹かれて藤堂 秀一郎と出会う。彼はその高校で“王子”と称えられる存在だったけど、美弥はそれを知らないまま唇を奪われて——？

王道恋愛、だと思います。恋愛初挑戦の作者ですが、いろいろと宜しく御願います。

00 プロローグ。

『二年生の先輩に、チョーイケメンがいるらしいよ』
私はその噂につられて、この高校を受験し見事合格した。
私を受験したのは、一昨年度に女子高から共学となった、私立桜ノ宮高等学校。

00 プロローグ。

校内は、春休みとあって静かだ。
私は今、受験した高校のオープンキャンパスに来ている。ここは本当に自由で、先輩方が部活動に励む姿を見学する事ができる。
「ねえ、麻理。ほんととこの制服可愛いよね!」
「うん、可愛い! 美弥に似合いそうだね」

私は、野沢 麻理という友達と来ていた。麻理はとてもおしとやかで綺麗だ。一言で言うなら、ヤマトナデシコ大和撫子。

「美弥、ちょっと御手洗いにいってくるね」
「あ、うん。分かった」

麻理が静かにトイレへと向かう。私はその間、どうしようかと周りを見渡した。
清潔感漂う廊下、綺麗に張られた広報用のポスター、しんと静まっている誰もいない教室。
ほかになにか無いかと、足を伸ばすうちピアノの音がした。

ポロンッ

ただ鍵盤をいくつか押しただけの、単なる音。だけど、なぜか惹かれた。
上のほうから音がする。私の足は自然に音がするほうへと、動いていた。
パタパタと、私が階段を登るたびにスリッパの音が響く。

階段の踊り場に出た。そこから見えたのはとりたて普通の教室だった。静かに残りの階段を上りきると、また音がした。さっきとは違うキーの鍵盤を長く押し続けた音。
確かに目の前の教室から、音がする。
私はその戸を開けた。

ガラッ

ピアノの前に座っている人が驚いたように振り返った。
私はその人の顔をみて息が詰まりそうになった。
すごい、綺麗な顔――

「あれ、今日は誰もこないはずだったけど」
その人が紡ぐ言葉ひとつひとは、私の頭の中に入って意味を成さない。
ただ、その人が私に話しかけてくれた、という事実嬉しくて喜んでいる。
だけど、何か言い返さなきゃ。

「えつえと、わつわたし学校を見に来たんです。受験したから」
ああ、どうしよう。声が震えて自分でも何をいつているのか分からなくなりそう。

「そっか。じゃあ俺の親衛隊メイドじゃないんだ」

あの、何をいつているのか分らないです。
そう口に出そうとしたけど、声がでなくなってる！

だって、その人がこっちに近づいて来るんだもん。

「ふーん…」

その人は私を上から下まで見た。絶対私の顔は真っ赤だったと思う。

「じゃあさ、俺を名前で呼んでみてよ？」

「えっ？」

「あっそうか、君は俺の名前を知らなかったか。俺は藤堂 秀一郎」
名前まで格好いい！ やっぱ声が震える。

「あっあの！ 秀一郎さん、私は小野田 美弥とついいいます」

藤堂さんがまた一歩近づいてくるから、すごくびつくりする。

でも、一歩で終わると思ったら、もっと近づいてきて……

「じゃあ美弥、お前はもう俺のものだ」

私の顎に綺麗な手を添えて、静かに私の唇を奪った。

それがファーストキスだった。

00 プロローグ。（後書き）

登場人物紹介

・小野田 美弥 おのだ みや
私立桜ノ宮高等学校の新入生。
慎重で小心者。恋愛に関してはほとんど無知識。

・藤堂 秀一郎 とうどう しゅういちろう
同じく二年。

学校など、公の目があるときは謙遜的な僕っ子王子を演じるが、プライベートでは自信満々な王様。

01 新入生

春だった。満開に咲き誇り、道行く人に桃色の雪を降らせる桜にも、若葉がちらほらと見え始めた。

今日は、小野田 美弥が私立桜ノ宮高等学校へ入学する日だった。だが、彼女は道路に学生の姿が見えない時間帯に通学路を歩いていた。どちらかといえば、^{ひんがし}人氣が少ない、早い時間だ。

01 新入生、

なぜ彼女が、これほど早い時間から学校へ向かっているのかと問われれば、その必要があったからだと答えておこう。彼女は見事(?)に入学式で新入生代表として、入学式の連絡やりハーサルのために、早めの通学が求められていたのだ。

自分の自宅から十五分も経たないうちに、立派な門の前まで来ていた。

美弥はひとつため息をつく、不安定になりそうな心を落ち着かせようと深呼吸した。

前にここに来た時は、野沢 麻理という友達と一緒にだったが、麻理はここを受けなかった。

門の黒い鉄格子に触れると、冷たくて緊張で汗ばむ掌には心地よかった。

冷たい感覚があのとき、触れられた細くて繊細で冷たい指を思い出させた。

(ッ！！？？)

美弥はすぐに顔が真っ赤になって、鉄格子から離れた。鼓動がもつとはやく刻み始めていた。

(・・・何思い出してるんだ私。あれは――単なるアイサツだったんだよ。きっと)

それがファーストキスであろうと、美弥は相手が本気だったとは考えなかった。

鼓動のはやまりが納まりきらないうちに、美弥は門を押していた。コンクリートをひきずる鉄の音を人のいない辺りに響かせながら、美弥は校内へとおそろのおそろ足を運んでいった。

春休みに来た時に、大体の場所は把握していたし、携帯に校内の案内地図が送られていたので迷う事もなかった。集合場所は昇降口だった。門から真直ぐ進むと着く、豊かな庭園を挟んだ分かれ道を右に行くと、校舎が見えてくる。ちなみに左は生徒寮や職員寮、ゲストなどを迎える小さな館がある。

美弥は間違えることもなく、校舎へたどり着いた。昇降口の前には、おそらく美弥を待っていてくれたであろう二人の女子生徒が喋りあっていた。

美弥は少し焦って小走りにそこへ行く途中で、気づいた二人の生徒はこちらを見るとにっこり笑った。

それがあまりにも目を捉えて放さないの、美弥の足はもつれ体が地面に落ちていた。

だが、美弥はそれがどういったことでもない、というように立ち上がるとなんとか二人の前にやってきた。

「あの…大丈夫？ 制服に砂ついてるよ」

二人のうち、背の低い少女が微笑を浮かべながら言うと、美弥は慌てて砂を払い落とした。その様子がおかしかったのか、背の高い方の少女は手を優雅に口元に添えて肩をゆらした。

それを美弥が見やると、顔をきりつとさせていった。

「わたくしは桜ノ宮高の三年代表の、二条院 まどかといいます。

新入生の小野田 美弥さんでよろしくて？」

「あつ、はい！ そうです」

美弥は震えそうになる声を無理矢理出すと、背の低い少女も名乗った。

「私は二年生代表の河井 炎美といいます。炎に、美しいでほのめと読みます」

人のよさそうな笑みをたたえた炎美は、初対面の美弥に強い印象を与えていた。

「ところで、美弥さん。我が高の理事長代理こと、二年の藤堂 秀一郎のことはご存知？」

「ぶつ部長?! それは直球すぎですよ!」

「炎美さん、部活動外で役職呼びは禁物でなくて？」

「すみません…まどか先輩」

まどかと炎美が話している間、美弥は驚きで一杯だった。

（アノ人は、理事長の代理だったんだ……）

だから、二人が喋っているにも美弥の返答を期待しているとは気づかなかった。

「……」

なにやら一人で考え込んでいる時間が長すぎて、苛立ちを覚えながらまどかは質問を繰り返した。

「ですから！ 藤堂 秀一郎というお方と直接会ったことがありますて？！」

上品な雰囲気体を漂わせているにも関わらず、怒った口調で下級生に突っかかるまどかは人気ひとけのない学校でよく目立っていた。

それによって物思いに沈んでいた美弥は、耳から入ってきた情報を整理するのに時間が掛かった。

「えっ！？ だっえ、あの…えっ？ あっありますけど、それがっどうかされたんですか」

炎美は変に二人の会話（？）に口を挟まず、初対面の美弥の人格分析を始めた。

だが、分析をするまでもなく彼女がまどかの反対いらだちの対象になりやすいと判った。

（部長をイライラさせていいことなんてない。この子が、もし聞いたとおりなら……）

それを想像しただけで悪寒が奔る。

まどかは風貌、言葉遣い、仕草から見てほとんどの一般人が“お嬢様”と称することは間違いない御令嬢だ。そのぶん、無駄に長い戯言ざれごとは慣れっこであり、めったに怒るという事態は起きない。

だが、まどかが普段我慢している分怒ったときの爆発は大きく、悪い状況がさらに悪化するのがやすやすと想像できる。

（だれか…部長を諫められる人はいない？）

炎美が周りを見渡すと、丁度背後にイタズラっぽい笑みを浮かべた男子生徒が、忍び足で歩み寄っていた最中だった。彼は炎美の視線

に気づくも、唇の前に人差し指を立てたまま、歩みを止めない。

炎美が彼のネクタイに目をやると、三つの硝子細工がついたピンが、ネクタイに挟まれていた。そのピンは彼が三年生であることを示していた。彼の制服は入学式当日だというのに、ネクタイはゆるんでいたし制服の前ボタンが止められていなかった。

男子生徒は、もうすぐブチ切れそうなまどかに飛びついた。

「まどか、何イラついてんの？」

ハツとまどかが振り向くと、ブロンドに限りなく近い茶髪の男子生徒がいた。

「ッ！？ まっ守さん？ はっ離れてくださいまし」

「いつもなら俺にチョー強烈な言葉を、投げてるまどかがどうかしたのかな？」

美弥は彼が少し誰かに似ているような、気がして首をかしげていた。まどかに聞かれた質問はどこか頭の隅へ追いやられた。

まどかが答えずにいると、代わりに炎美が答えた。

「まどか先輩が、美弥さんにあの噂のことを直球的に聞いたんですよ。守先輩」

「ふーん。…まあ、俺もわかるかな。秀一がしたくなるのも」

「そんなにそりますの？ このような小心者が」

「そこがイイんだと、思うけどね！。守りたくなるのが」

それほど専門的なことは話に出ていないのだが、美弥はきょとんとしていた。自分が話題にされているのは分かるが、『したくなる』とか『そそる』というのがまったく分かっていなかった。

美弥が思い切って声をだすと、

「あっ…あのお」

返答は違つように解釈されていて。

「まあ、そうですね。本人の前でそういうことを言う物ではありませんものね」

と、今の話が理解されている、と勘違いされていて、美弥はなおも混乱するのであった。

「守先輩、彼女と直接的な面識は？」

「秀一から話を聞いたただけ。そうなると自己紹介をしなくちゃならんのか。俺は藤堂 守。あいつの兄貴だ」

“兄貴だ”と守の口から出て、美弥はやつとはじめの疑問が解消された。

（あの人に似てたんだ……。どうりで）

「えつとあう。あのっ、私は小野田 美弥といいます」

「じゃあ美弥ちゃんだなっ！」

守がニカツと笑うと、人を惹きつける魅力があった。美弥はやっぱり二人が似ていることを確信した。

01 新入生（後書き）

登場人物紹介

・二条院 まどか にじょういん まどか

私立桜ノ宮高等学校の三年。

プライドが高く、切れると怖い。教養が高い口調が特徴的。

・河井 炎美 かわい ほのみ

同じく二年。

常に冷静沈着で人格分析が得意。だが、まどかに振りまわされやすい。

・藤堂 守 とうどう まもる

同じく三年。

藤堂秀一郎の兄で、弟の事を秀一と呼ぶ。遊び人っぽいイメージが強い。

02 代表の私は

美弥、まどか、炎美、守の四人は校舎の奥にある体育館へ歩いて
いた。

生徒はほとんどいないものの、廊下ですれ違う教員が何人かいた。
歩きながら守は、まどかの代わりに美弥に質問をいくつも浴びせて
いた。

02 代表の私は

「いつどこで秀一と会ったの？」

「えっと、春休みにこの高校の教室で」

美弥は質問に答えると、何もなしどころなのに躓きそうになった。
身体が床へと倒れていく———と目をつぶった途端、

(…え?)

「大丈夫か？」

守の大きな腕に支えられていた。

美弥が目を開いて上を向くと、すぐそばに守の顔があつて、顔を真
っ赤にさせた。

(やつやだ！ 顔もそっそつくりだった！)

バツと直ぐに守から二、三メートル離れる。

「守先輩にもフラグが、あつたんですね」

「秀一郎様だけでなく、守さんまでもなんて！」

はてなマークを頭の上にくつものせている美弥の顔は、また都合

のよいほうに解釈されていて。

「すましてるわ！　なんてこと。こんな状況用のスルースキルを取
得済みなんて！」

「まどか先輩、天敵ですね。タイプが正反対ですから」

美弥はどうしていいかわからず、身を強張らせていると、声がひと
つかった。

「遅いと思ったら、皆一緒だったんですね」

鶴の一声ならぬ、王子様のイケメンボイス。やはりそれには有無
をいわせない力を持っていた。

まどかが嬉しそうに顔を輝かせた。

「秀一郎様！　わざわざ迎えに来てくださったのですか！」

「まどかさん、わざわざなんて。僕をなんだと思ってるんですか？
一介の生徒に過ぎない面もありますが、理事長代理という面も担
っているんですから。学校のことにおいては、僕が自ら動かなけれ
ば」

にこやかに話すまどかと秀一郎を見ると、美弥は初対面の時に
あった印象と違うものを受ける。

不思議に思っていると、守が炎美に聞こえないように、そっと美弥
に耳打ちした。

『あいつは猫かぶってんだよ。めったなことでも俺、なんていわねエ
んぞ？』

美弥は驚いた顔で守の顔をまじまじと見つめた。

（あ・・・そうか。守先輩は、兄弟なんだよな。兄弟のことをよく
知ってるのはあたりまえだね）

「ん？ 兄さんか。兄さん、美弥さんが可愛いからって近づきすぎですよ」

「秀一、なんで美弥ちゃんと面識あるんだ？」

「春休みに偶然会ったし、名乗りあつたしね。ね、美弥さん」

「えっ？ あっそうっすね」

そのうち広々とした体育館に着いていた。入学式の準備をしていた女の教師がひとり、こちらへ走ってきた。

「崎野先生、どうかされたんですか？」

彼女は崎野というらしい。崎野はジャケットのポケットから、小さなピンを取り出した。

「えーっと… 新入生の小野田さんいる？」

「わッ私ですけど？！」

崎野は美弥の前に来て膝立ちになった。

（ッ！？ はい？）

崎野は制服の上着のすそに銀色に輝くピンをはさんだ。ピンには、赤色に色づけられた硝子で出来た、丸い玉がひとつついていて、それはとてもよく目立っていた。

「こっこれは？」

「新入生代表の証よ。ほかの一年生は緑色なんだけど、ね」

生徒と仲良くしようとする教師そのものだった崎野は、『じゃあ、スピーチ頑張つて』と言い残すと、また準備に取り掛かっていった。「まだ完全に準備ができていないようですね。美弥さん、スピーチは暗記済みでして？」

「とっころどころ、あやふやですっけど、大丈夫です」

「では、ここで暗唱してみては？ 練習できるだろうし」

炎美がそう提案したので美弥は、入学式のスピーチを暗唱する羽目になった。

「じゃあ・・・始めます。日差しがだんだん温かくなり、空が広く晴れ渡った今日という日に――」

美弥は落ち着かない様子で手元に視線を落とした。手には愛読している文庫本がある。だが、美弥は本の文字など目に入ってなかった。新入生の新しい教室におとなしく座っているものの、入学早々から浮いているような気がしてならなかった。

小野田という苗字のせいで名簿番号も早いほうであるので、席は右端の列だ。教室の真ん中というよりも、右端であるのにも関わらず、幾つもの視線を感じる。ほとんどが多分好奇心のつもりなんだろう。新入生の代表が美弥であるということは、入学説明会の際にも大々的に発表されていたせいもあるだろう。

（ああ・・・イヤだ）

美弥は入学式も始まる前から、嫌気が差してきた。このまま一年、下手すれば三年間、ひとりきりで過ごす事になるかも、と心配してしまう。ふと時計を見やれば、既に八時半を過ぎていた。

そろそろ入学式だ、と美弥が思い始めるとチャイムが鳴り教師が入ってきた。

「おはよう御座います」

挨拶しながら入ってきた教師は、返事を期待していないようで、間も空けず続けた。

「佐伯 慎といいます。このクラスの担任ですが、自己紹介は入学式のあとでします。入学式の入場のために廊下へ並んでください」

佐伯はとても事務的な教師のようだ。てきばきと指示を出しながら生徒達を並ばせる。美弥もそれにならい、廊下へと出た。元々が女子高とあって、多くが女子で男子は目立っていた。

同じ茶色の制服だが、男子のブレザーの襟に使われている生地は、落ち着いたこげ茶だ。新品でパリッとした彼らの制服は、肩の辺りがかたまっていた。

（やっぱり一年も着こなすと、制服も動きが違うなあ）

美弥が秀一郎のことを考えていても、新入生の列は進んでいく。階段を下りていくと、ほかの学年の階でも廊下に並んでいた。列の先頭に立っている男女の生徒はクラスをまとめる代表のようだ。

女子生徒が、ちらりと階段を下りていく新入生の一団を見やった。

（あつ！ 二条院まどかさん！）

美弥とまどかは目があつた。途端に美弥が後ろの同級生に押し流されてまた階下へといく。

まどかは新しいクラスみんなを座らせると、先生に報告に行った。

「先生、A組の女子全員揃いましたわ」

「わかった。まどかは先に体育館へいきなさい」

「はい」

まどかは新入生の最後尾についていくように階段をおりていった。

列から律儀に並んで体育館へ入った美弥は少ばかり驚いた。それはほかの新入生も同じよう。

リハーサルのために来ていたときと、まったく椅子の配列が違うのだ。体育館の中央に正方形に並べられたパイプ椅子はおそらく新入生の分だろう。体育館の舞台の上は、それほど変わっていなかった。

スピーチ用のマイクと大きな机が置いてあり、そのすぐ下には教師たちや来賓の席が並べられている。おそらくそこが保護者やPTAの座るところだろう。

だけど、ほかの上級生は？

美弥が体育館の入口を振り返ると、ちょうどまどかが入ってきたところだった。まどかはわざとらしい笑みを浮かべた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2948j/>

元女子高の王子様！

2010年10月11日01時54分発行